

自分らしさが輝く表現活動の在り方

－見る目、感じる心をはぐくむ絵画表現を求めて－

長期研修員 山下 裕 文

Yamashita Hirofumi

要 旨

小学校の図画工作科の学習において、自らが思いをふくらませながら、つくりだす喜びを味わう子どもを育てるための指導の在り方について、題材の工夫や学習展開、評価の方法、効果的な鑑賞の方途などを具体的に研究する。

キーワード： 発達段階、立体・空間表現、はらぺこあおむし、試行錯誤

1 はじめに

子どもにとって絵を描くことは、自分の思ったこと、考えたことを親しい人に伝えるコミュニケーション手段の一つで、子どもからのメッセージである。これは自分の想像した世界を描き、独り言を言いながら内言の世界を構築し、自我を育て心の中に豊かな叡智をはぐくむ大切な働きをしている。

しかし、子どもの中には、生活体験やその題材に対する知識や体験が乏しいことなどから、絵を描くことに自信を失ったり、興味・関心がなく気力に欠けたりする子どももいると言われている。

学習指導要領では、「生きる力」や「確かな学力」が謳われている。感じたことや考えたことなどを基に、想像力を働かせながら自分らしい発想をし、よさや美しさなどを考え、のびのびと自分らしさを探究していく表現活動こそ、学習指導要領のねらいに迫るものと考えられる。

このような観点から、思いをふくらませながらつくりだす喜びを味わう子どもを育てるための指導の在り方について、具体的に研究する。

2 研究目的

子どもの絵画表現の発達の過程から今日的課題を明らかにし、絵画表現の基礎・基本の定着を図り、思いをふくらませながら主体的な学びをすすめるためには、どのような題材の工夫や学習展開、評価の方法、効果的な鑑賞の方途などがあるかを探る。

3 研究方法

- (1) 子どもの絵画表現の指導に関する先行文献などの調査
- (2) 豊かな人間性をはぐくむための指導と評価の在り方の研究
- (3) 研究授業による検証と考察

4 研究内容

- (1) 子どもの絵画表現の指導に関する先行文献などの調査
ア 子どもの発達と絵画表現

(ア) 子どもの絵の発達段階

子どもの絵の発達段階は、1歳半頃からのなぐりがきの時期から始まり、象徴期、図式期、写実の黎明期、写実期となり、14歳頃からの完成期へと続く（図1）。



図1 子どもの絵の発達段階

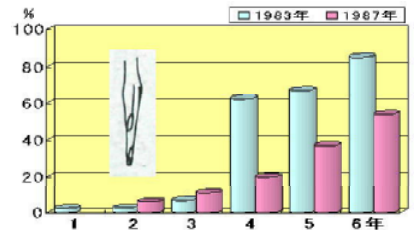
引用「美術による人間形成」ローウェンフェルト

(イ) 絵画表現からみた今日の子どもの発達

研究者の間では、1980年代後半頃から、子どもの絵画表現に今までにない変化が表われているという指摘がある。

a 「気をつけ」の姿勢を描かせた調査

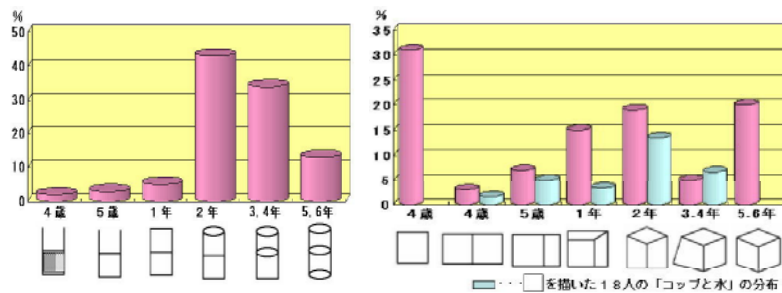
東京の元小学校教員、堂本保さんは、子どもが「人の姿・形」をどのように認識しているのか、小学生を対象に1983年、87年の2回にわたって調査した。子どもに「自分の『気をつけ』の姿勢を、鏡を見ないで前から描いてください」と話して描かせたものである。手のひらを正面からでなく側面から見たように正しく描いている子どもが、グラフ1に示すように1983年では、第4学年から格段に増える。これは自分を客観的に見る力が育ち、抽象的概念と客観性の発達の表れと考えられる。ところが、1987年に再調査したところ、第4、5学年にあたる9、10歳の節がなくなり、発達が歴然と遅れている調査結果が出た。



グラフ1 「気をつけ」の姿勢を描いた作品で掌の側面を描いた調査
引用『子どもは絵で訴える』のその後
堂本保

b 立体・空間表現の調査

時期を同じくして、神戸大学の東山明さんは、子どもは立体や空間をどのように認識しているのか調査をしている。「コップと水」の表現において小学校第1～3学年では、楕円や円を描き加え、第4～6学年では、コップの上部や水面を楕円にして視覚的な写実性を出そうとする。ところが、その後90年代後半にも同じ調査を実施したところ、高学年の子どもでありながら視点を統一した絵や奥行きのある空間表現が少なくなっていた。



グラフ2 「コップと水」(左図) と「立方体」(右図) の認識と表現

また、「立方体」では、4歳児に多く見られる平面タイプが31%、立体表現の前段階として立方体を意識し、表現しようとするが平面的な表現となっている1、2年生タイプの子どもの34%にも達する。この平面タイプを描いた31%の子どもは、「コップと水」では、どのように表現しているか調べてみると、右側に示した4歳から3、4年タイプにわたる白の棒グラフのとおりであった。

以上の調査結果から、現代の子どもは、奥行きのある表現が少なくなりつつあり、全般的に発達課題の獲得が2年ほど遅れているように思われる。

イ 絵画表現の今日的課題

(ア) 表現活動では、自分の目と手、体全体の感覚を働かせ、直接、対象とかかわらせ形や色の特徴、美しさなどを見だし、それをとらえて表すことを大切にする。

(イ) 表現方法については、単なる方法や技術のみの押しつけ、また子どもまかせにならないよう配慮する。そして発達課題を踏まえ、思考とつながった感性を表現する手段を獲得できるようにする指導が求められる。

(ウ) 表現活動は、作品を通して自分の思いや考えをもち、他者とコミュニケーションする楽しさを味わわせるとともに、「今の自分を見つめる」活動であることに気付かせる。

ウ 絵画表現の基礎・基本

図画工作科における基礎・基本は、学習指導要領に示された基礎的・基本的な内容である。それを観点別学習状況の評価の視点として示されている「造形への関心・意欲・態度」「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」の四つの資質や能力が、総体としてバランスよく育成されることである。絵画表現においては、子どもが特に材料の特性を生かした表現を体験することによって、表現活動や作品の価値を理解し、継続的に表現する喜びや美しいものを味わう喜びを得ることだととらえられる。

(2) 豊かな人間性をはぐくむための指導と評価の考察

ア 楽しい表現活動となる題材の設定

生活を対象化してみる目が育ち、願いやめあて、感じる心をもって自分の生活に自覚的となるとき、人は「生きる力」を高めていくと考える。子どもが生活に根ざした願いやめあてをもち、それをなかまと分かち合うようであってほしい。そのため、体全体の感覚を十分に使って、自分たちのすてきなくらしぶりを表現させたい。このことが自信となり希望となり、のびのびと自分らしさを探究していく表現活動に取り組んでいく原動力になるのではないだろうかと考え、生活画の題材「ある日のこと」(3年)を検討した。

(ア) 表現力を育てる三つの視点

- ・ 目的意識 子ども自身がやるべきことがはっきりと分かるということは、活動の大前提である。
- ・ 選択 自分の思いにぴったりとくる描画材を選択する。
- ・ 試行錯誤 試行錯誤によって新しい発見があったり、失敗への怖さを取り除いたりすることができる。

(イ) 表現力を育てる四つのステップ

- ・ 「である」 自分のイメージを意識した表現方法を模索し、様々な描画材を使って表現していく。
- ・ 「みつける」 参考作品の鑑賞を基に、自分の世界をふくらませるための手立てとして、短文を書きラフスケッチを描いてイメージを広げていく。
- ・ 「ふかめる」 自分の思いを追究し、自分の表現を乗り越え、新しい自分を見付けるという試行錯誤をしながら自分の絵を描く。
- ・ 「ひろげる」 鑑賞を通して作品のよさを見付け、自分の絵と違う表現方法を学ぶ。

イ 作品のよさを味わわせる鑑賞の指導

子どもの豊かな心をはぐくむためには、ものの見方や感じ方をどのように広げていくかが重要になる。授業の導入においても、子どもの意識付けのために鑑賞体験を取り入れるなどの工夫が必要である。

ウ 子どもの意欲を引き出す評価の工夫

題材の目標に準拠した評価規準を設定するとともに授業中の教員による行動観察だけでなく、学習カードやデジタルカメラ、つくりつつある作品、子どもの自己評価や相互評価など、多様な方法を用いて多面的に評価する。

(3) 開発した題材による授業実践

ア 本時の学習 (全6時間 第2次 感動の場면을絵に表そう)



1 本時の目標

人や物の動き、まわりの様子などを効果的に表すためには、大小や重なりなどの画面構成、簡単な混色の彩色など、表現方法を工夫して絵に表す。

2 評価規準

	観 点	「おおむね満足できる」(B)と判断される状況	到達できない子どもへの対応例
表 現	造形への関心・意欲・態度 (◎)	自分の思いを進んで表現し、楽しんで取り組もうとする。	想像がふくらまない子どもには、会話を通して具体的なアイデアを与える。
	発想や構想の能力 (△)	中心と周りの色をどのように組み合わせると感動したことを伝えられるか考える。	子どものもっているよさを認め励ましながら、重色や切り取り、新しい画材を与えるなどする。
	創造的な技能 (□)	自分の伝えたい気持ちにあった簡単な混色をつくり、効果的な彩色ができる。	表したい場面に適した色と一緒に考える。また、少しでも子どもが進んで取り組んだ部分は、しっかりと共感する。
鑑 賞	造形への関心・意欲・態度 (●)	友達の作品に関心をもち、表したい部分を理解し、共感しようとする。	友達の発表の注目点を理解するように助言する。
	鑑賞の能力 (☆)	友達の表し方に関心をもち、工夫している部分や面白い部分を見付けることができる。	好きだ、気に入ったと思う作品を見つけ、どの部分が好きか考えるようにする。

3 本時の展開

分	学習活動、() 内は評価規準	教員の役割(○)と子どもの予想される反応(・)	評価の工夫・備考
0	1 学習内容をつかむ。	・前時までの活動を振り返る。	
	色を工夫して絵に表そう。		
	2 学習課題をつかむ。 (◎) ・色の工夫の仕方を考える。	○「色を工夫しているところは、どこでしょうか。」 ・参考作品「楽しかったプール」を見て、考える。 (色混ぜ … 水の色=青+白 パス … 水の流れ (必要に応じて使う))	紙板書で確認する。 参考作品 本時の活動の見通しをもつことができたか。
10	3 彩色する。		
	中心となる描きたいものから描いていこう。		
	・中心と周りの色をどのように組み合わせると感動したことを伝えられるか考え、簡単な色混ぜをして色を置いていく。 (△、□)	・中心と周りの色をどのように組み合わせると感動したことを伝えられるか考える。 ○「中心となる描きたいものや広い部分から描きましょう。」 ・色混ぜや水加減、色の置き方を工夫する。 ・自分が表現したい絵にするため、必要に応じてパスなども使う。	水彩絵の具 パス サインペン 試し紙 意欲的に活動しているか。
30	草や木の葉の色は、緑の色だけでいいかな。		
	・自分の伝えたい気持ちに合わせた色混ぜを考える。 ・いろいろな緑の色を発見、発明していく楽しさをつかむ。	○「色混ぜを工夫しましょう。」 ○子どもの悩みや疑問に耳を傾け、よく似た場面の子どものを集めて、一緒に考えさせる。 ○  +  … 実際につくって発見できる喜びを味わわせる。(緑、青、藍)	自分の思いが表われるように、色の効果を考えて工夫しながら表現しているか。
50	失敗しても大丈夫だよ。		
	・自分でどうしていくのか考える。 ・失敗しても大丈夫、先生や友達と考え、自分が納得のいく方法でやり直す。	○なかなか活動できなかつたり失敗したと思ったりしている子どもには、その子どものもっているよさを認め励ます。 ○場合によっては、気に入っている部分を切り取り、別の紙に貼り直したり、白絵の具で消したり、新しい画材を与えたりするなど 具体的な方法を提示する。	作品製作を途中であきらめ投げ出していないか。
60	自分なりの工夫をしている作品を紹介しよう。		
	・友達の作品のいいところを見付ける。 ・友達の作品を参考にしながら、更に表現を楽しむ。(◎)	○「友達の作品のいいところ見つけましょう。」 ○楽しみながら絵を描いている様子や作品をデジタルカメラに撮って映し出し、工夫しているところを認める。	自分の取り入れたいところがあれば見付ける。
80	4 本時の活動を振り返る。		
	自分の活動や作品を振り返ってみよう。		
	・ふりかえりカードに記入する。	○「今日の活動は、楽しかったですか。ふりかえりカードに書きましょう。」 ○次時は、作品発表会であることを知らせる。	ふりかえりカード 楽しく絵を描くことができたか。
90			

イ 授業の分析

(ア) 混色の教材「はらぺこあおむしの色混ぜ」

導入では、「楽しかったプール」の下絵を基に彩色の順序や混色の工夫、また筆のタッチに興味をもたせ学習課題をつかませることができた。また、パールオレンジの色のつくり方を例に、パレットや筆、ふきん、試紙などの使い方などについて、実際に教員が模範を示した。

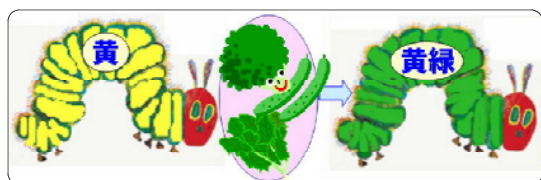


図2 はらぺこあおむしの色まぜ

子どもが一定描き進めたところで、混色の視点を更に広げるために、食べる物によって色が変わる「はらぺこあおむしの色まぜ」をパワーポイントで示し考えさせた。黄のはらぺこあおむしを見せると、子どもから「レモン食べた」「バナナ食べた」という意見がでた。

「何を食べて黄緑のはらぺこあおむしになったでしょ

う」と発問すると、「野菜・葉っぱ・レタス」など元気な声が返ってきた(図2)。

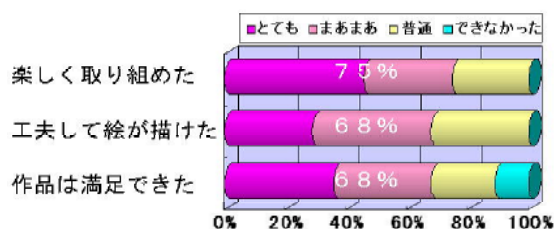
(イ) 個に応じた指導

「運動会」を描いている子どもは、色混ぜの工夫が分からないようで、教員に確かめてからでないと彩色できないようだった。作品は、色の帽子をかぶっているものの動きがなく、余白を広く残し何を表現したかったのか思いが伝わってこない。この子どもの立体・空間の認識と表現は、5歳から小学校1年生前後の発達段階で、思いを引き出しながら細かいアドバイスを与え個に応じた指導をすすめたが、子どもの思いにそった描き加えをすることまでには至らなかった。

本時の学習展開では、混色を考えながらの製作のためか多くを描きすすめられず、「失敗しても大丈夫」ができなかった。これは、自分の思いとずれていくことに気づき、行き詰まる子どもへの対応として、思いにそわないところを絵の具で重ね塗りをして消したり、上から紙を貼ったり、場合によっては切り取るなどの試み活動を保障するものである。自分の思いを深め追究し、のびのびと自分らしさを探究していく表現活動をすすめ、自信を回復させ、表現する楽しさを味わわせたかった。

(ウ) 自己評価表「ふりかえりカード」による分析

授業後に子どもの自己評価を実施し、4段階〔とても、まあまあ、普通、できなかった〕で回答させた。その結果、「楽しく取り組めた」(造形への関心・意欲・態度)と「工夫して絵が描けた」(発想や構想の能力、創造的な技能)という項目に対しては、〔とても〕と〔まあまあ〕の回答が合わせて約70%あった。



グラフ3 ふりかえりカードの結果

このことから、提示した「楽しかったプール」の下絵や「はらぺこあおむしの色まぜ」の教材は、子どもにとって十分理解でき、興味をもって受け入れられたと考えられる。

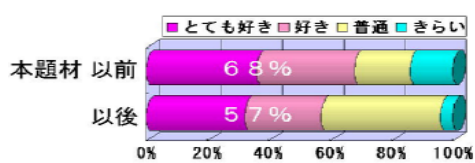
これに対し、「作品は満足できた」という項目に対しては、〔できなかった〕の回答が11%あり、製作への意欲的な取組が必ずしも満足な作品には結び付かないところに表現の難しさがあるといえる(グラフ3)。

ウ 発達段階からみた特徴的な作品

子どもの作品は、バラエティーに富んだ作品ばかりで、楽しく色混ぜしながら彩色ができたように思われる。本時の目標にある画面構成や簡単な混色の彩色など、表現方法を工夫した絵もあれば、低学年に見られる発達段階の絵も見られた。多視覚的描法や展開描法の絵、また基底線にものを並べる表現など、子ども一人一人が思いをふくらませながら、自分なりの表現ができたように思われる。

今後は9歳、このころから見たとおり真実に迫ろうとする写実的表現傾向の絵を描こうとするので、この質的転換期をうまく乗り越えさせられるよう、更なる指導が求められる。

エ 「絵を描くことは好きですか」の質問項目



グラフ4 「絵を描くことは好きですか」

本題材の前後二回にわたって「絵を描くことは好きですか」と設問した。グラフ4のとおり[とても好き、好き]と回答した子どもが、約10%減ったことは残念であるが、[きらい]と回答した子どももほぼ同数減ったことから、研究の意味を見いだしたい。[とても好き、好き]が減った原因は特定できない

が、個性を認め生かし「思い」を十分に引き出せなかったことや、子どもの知的能力と描画能力がうまく合致しないことによる問題が表れつつあるのかもしれない(グラフ4)。

5 研究のまとめと今後の課題

生活画の題材は、小学校第3、4学年では友だちや家族と一緒にしたことなど、生活を振り返りその子なりの発見的実感を描くことができる題材である。一人一人の「思い」を引き出し、子どもが描画材を選択し、いつもと違う描画材に出会うことによって興味・関心を高めることができた。また、表現の幅を広げ、自分の考えや思いを大切に、作品を通してそれぞれの子どもの思いを互いに共有することができた。

学習展開においては、子どもの発達段階に配慮しながら個に応じた指導の工夫を大切に。また混色の教材を使った色の工夫や様々な表現方法の提示、試み活動の保障など、主題に対して見通しがもてるような支援と指導の在り方を工夫することによって、のびのびと自分らしさが表現できたように思われる。

評価においては、学習カードやデジタルカメラ、つくりつつある作品、子どもの自己評価や相互評価など、いくつかの方法を駆使すれば、子どもの意欲を引き出す多面的な評価ができ、客観性、信頼性がより高まるということが分かった。また本題材では、授業の導入にも子どもの動機付けのために鑑賞活動を取り入れたが、自分で思いを広げ構想する機会をかえて狭めているのではないかと危惧もする。発想を広げるための導入の大切さと難しさを改めて感じた。

今後の課題は、学習集団の状況や発達段階に即したより柔軟で包括的な視点から、子どもの興味や意欲を引き出す授業の在り方や、絵画表現の年間を通したカリキュラムの在り方を検討する。また、子どもの意欲を引き出し、感性をはぐくむ指導についての評価の在り方を検討する。

以上の課題の追究を通して、子どもが感じたことや考えたことなどを基に、想像力を働かせながら自分なりの発想をし、よさや美しさなどを考え、のびのびと自分らしさが更に表現できるようになるとともに、一人一人の個性がみんなの中で輝き、仲間と分かち合うようであってほしいと願う。

参考・引用文献

- | | | | | |
|-----|--------------|-----------------------------------|--------------|------|
| (1) | ローウェンフェルド | 美術による人間形成 | 黎明書房 | 昭38 |
| (2) | 堂本保 | 『子どもは絵で訴える』その後
(現代 造形・美術教育の展望) | 新曜社 | 1992 |
| (3) | 東山明・東山直美 | 子どもの絵は何を語るか | 日本放送出版協会 | 1999 |
| (4) | 滋賀県草津市立老上小学校 | 図画工作科『絵に表す』における表現活動について | 教育美術2002年6月号 | 2002 |